



のむら やすよ  
**野村 恭代**

大阪市立大学大学院  
生活科学研究科准教授



### ほんの少しの配慮

生活のしづらさのある人のなかには、ほんの少しの配慮を必要としている場合があります。たとえば、避難所のなかに「ダンボールベッド」のようなものが一つあるだけでも、配慮を必要とする人にとっては肉体的・精神的な負担が大きく軽減されることがあります。

ただ、『配慮』は別の場所に隔離する『こと』ではないことは、強調しておきたいと思います。

東日本大震災発生時は、すべての人が「逃げること」がそのときに「すべきこと」の最優先事項でした。障害の有無にかかわらず、あらゆる人が声をかけあって、手を取り合って、避難しました。

そして避難所に移り、最初のうちは障害の有無にかかわらず、食物を分け合い

ながら、励まし合いながら過ごしました。ところが、避難所での生活が長引き、そこで過ごす時間が長くなるにつれて、なんらかのこだわりがある人や突然大声を出す人、独り言を言う人に対して、他の避難者から苦情が出るようになりました。

避難時や避難所での生活が始まったばかりの頃は、あらゆる人が支え合いながら生活していたのですが、時間が経つにつれて、生活のしづらさのある人を別の場所に移してほしい、との要望がちらほらと出始めたのです。その結果、生活のしづらさのある障害者や高齢者は、本人が希望していない場合であっても、一般の避難所とは別の場所に移動するといったことが見られました。



### 平時の支え合いが 災害発生時の力になる

しかし、平時の生活においても、あらゆる人が地域のなかで生活する権利を持っています。また、あらゆる人が同じ地域住民としてつながることが、地域の防災力を高めるうえで必要なことなのです。また、これからの日本は、少子高齢化社会に加えて人口減少社会を迎えます。すべての人が年を取り、いつかは高

齢者になります。元気なまま高齢者になる人ばかりではありません。地域住民がつながりながら、地域のなかで支えあうということは、防災においてのみならず、平時の地域社会にも求められることなのです。災害に対応する力を発揮できるかどうかは、平時の取り組み次第といっても過言ではありません。

これからは、いつ、どこで、どのような災害が起こるかわかりません。換言すると、いつ、どこで災害が発生してもおかしくないのです。いつ、自分たちの身の回りで災害が起こっても、冷静かつ適切な対応、そして人と人とのつながりを保ちながら支え合えるよう、普段から備えておくことが重要なのです。



コミュニティ防災教室での  
段ボールベッド組み立て訓練の様子